

# 郷土の誇り 山極博士

1915(大正4)年に世界で初めて人工がんの発症に成功した  
上田市出身の医学者、山極博士(1863~1930年)。

地元の住民たちは郷土の偉人を後世に語り継ぎ、顕彰活動が続  
けている。そうした中、博士の生涯を描く映画「うさぎ追いし」山  
極博士物語」がこの夏、上田市などで撮影され完成した。12月の  
全国公開に先駆け11月5日から同市と長野市で先行上映されるの  
前に、改めて博士の功績を振り返りつつ、顕彰に取り組み住民たち  
映画製作に携わった人たちの思いを伝える。

「真田幸村に続く郷土の先  
人として、山極博士を押し出  
していきましょー」

今月上旬、上田市で開かれ  
た上田郷友会上田部会の例  
会。席上、部会長の元真議、  
島田基正さん(71)はこう強調  
した。市の歴史や文化などを  
学ぶ同部会はこの日、映画の  
監督を務めた近藤明男さん  
(69)を講師を迎えた。

上田郷友会と山極博士のつ  
ながりは深い。郷友会は18  
85(明治18)年、当時東京  
大医学部生だった山極博士ら  
が中心になり、在京の上田田  
身舎によって設立された。戦  
後の一時期を除き月報を発行  
し続け、現在も東京と上田で  
活動している。

月報創刊号の巻頭で、山極  
博士は「信州の中で文武の優  
れている松代や松本にも負け  
ない上田をついで」と記し、  
生涯にわたる郷友会に関わり

## 映画ロケ機会に親近感



(東大医学  
部所有)

た。2012年に山極博士の  
伝記を出版した書話作家神田

山極博士 1863(文久  
3)年、上田城下の鎌原(現在  
の上田市中心西)の上田藩士・  
山本家に生まれる。上田藩制中  
学校(現上田高校)卒業後、東  
京で開業医を営む山極家の養子  
になった。東京大医学部やドイ  
ツで病気の原因や発生の仕組み  
を研究。40代の頃にがんの研究  
を始め、1915年に人工がんの  
発症に成功した。これにより  
がんの発生や進行、転移を詳し  
く観察できるようになった。治療  
法の研究が飛躍的に進んだとさ  
れる。同医学部教授を定年退官後、  
67歳で死去した。

# 顕彰の機運 広がり期待



上田市丸子地域の住民らと懇談する近藤さん(中央)

愛子さん(68)上田市本郷II  
は「山極博士は、上田に心寄  
せる郷土愛や日本の将来を思  
う祖國愛に満ちていた」と話  
す。

専清沢尚久さん(82)東京都  
墨田区IIは「文化活動にも熱  
心だった一面も知ってほし  
い」と力を込める。

山極博士は千曲川にちなん  
だ「曲川」という号で俳句  
や川柳を詠み、月報などに載  
せていた。人工がんできた  
際に詠んだ「癌出来つ意気昂  
然と二歩三歩」は、東大医学  
部や上田市の上田城跡公園に  
句碑がある。郷友会の代表幹

映画は、約8割が上田市中  
で撮影され、別所温泉や大郎山  
千曲川などが登場する。同部  
会例会での講演で、近藤さん  
は「それぞれの場所がどのよ  
うに使われているか考えなが  
ら、鑑賞してもらえば光栄  
です」と述べた。

この日の夜、同市上丸子の  
国登録有形文化財「依水館」  
では、近藤さんや映画を企画  
した上田市出身のプロデュー  
サー永井正夫さん(71)東京  
都練馬区IIを囲み、懇親会が  
開かれた。依水館が山極博士  
の自宅として撮影に使われた  
ことへの「お礼」として、丸  
子地域の住民有志でつくるク  
ループ「MM21」が招いた。  
会長の笹井文雄さん(66)は  
「丸子地域で山極博士はなじ  
みが薄かったが、撮影を機に  
親近感が湧いた」とあいさつ。  
「映画のロケ地として依水館  
も注目されればうれしい」と  
期待した。

山極博士の顕彰活動はこれ  
まで、生家があった上田市の  
鎌原(中央西)を中心に、同  
市中心部で特に活発だった。  
博士生誕150周年だった13  
年には、市民いっしょの「山  
極博士顕彰会」(事務局・上  
田市中区)が、博士の功績や  
関係した人物などをまとめた  
冊子を作り、記念シンポジウ  
ムを開催するなどしてきた。  
「丸子地域を含めた上田市  
全体として盛り上がりつつ  
いてほしい」。顕彰会の幹事を  
務める岡崎光雄さん(79)上  
田市中心4IIは、映画製作を  
一つのきっかけに顕彰の機運  
がさらに広がっていくことを  
願っている。

## 映画「うさぎ追いし」の公開を前に

南信

中信

# 郷土の誇り 山極博士

中

「私がかんから牛選でできたのは、山極博士のおかげでもあります」

世界で初めて人工がんの発生前に成功した上田市出身の医学者、山極勝三郎博士を描いた映画「うさぎ追いし」山極勝三郎物語」を企画した同市出身のプロデューサー永井正夫さん(左)は、がん研究会有明病院(東京都江東区)のロビーに掲示された病院の沿革を見ながら話す。

がん研究会は「がん克服をもって人類の福祉に貢献する」との目標を掲げ、1908(明治41)年、当時東京大医学部病理学教室の教授だった山極博士らが中心になって発足させた。映画の医学監修を務めたがん研究会の病理部長石川雄一さん(右)によると、「山極がん研究所」と通称された時期もあったといい、現在もがん専門病院を運営しながら研究成果も上げている。

永井さんは2006年に大腸がんと診断され、手術を受けた有明病院で山極博士の名前と出会い、同郷を知った。「功績の大きさと比べて光の当たり方が弱いのが悔

しい」と感じ、映画化を決意した。

山極博士は市川厚一助手と共にウサギの耳にコーラター

ルを塗る実験を繰り返し、1915(大正4)年、人工のがんをつくり出した。世界的

な実験の成功にもかかわらず、26年のノーベル医学・生理学賞は、発がんの寄生虫説を唱えたデンマークのフィベル博士に与えられ、山極博士は受賞を逃した。しかし山極博士の死後、フィベル博士の標本が人工がんではないことが分かった。

「2人に1人はがんになる時代。身近な病気になった」と話すのは、信州大医学部包括的がん治療学教室(松本市)

映画「うさぎ追いし」山極勝三郎物語」映画のタイトルは、ウサギの耳にコーラターを塗ってがんを発生させた実験と、唱歌「故郷(ふるさと)」の歌詞を重ねた。山極博士と共に研究に携わった市川厚一・北海道大教授との師弟愛、博士の妻かね子との夫婦愛、上田市出身で民生委員制度の創設者とされる小河滋次郎との友情も描いている。市内での撮影は国登録有形文化財「依水館(いすいかん)」や北岡観音などで行われ、主演の博士を遠藤雄一さん、かね子を水野真紀さんが演じている。近藤明男監督。

の特任教授谷口俊一郎さん(65)。「かつては死の病だったが、現在は早期発見すれば治る」とがん研究の進歩を強調する。「その一歩を踏み出したのが山極博士の研究。今や日本のがん研究は世界に誇れる。博士の出身地の信州で研究していることをうれしく思う」

同学部3年伊藤国秋さんは「山極博士のことは授業で耳にした。自らの仮説を信じ、地道に検証して社会貢献をなした生きざまを尊敬する」と

東大医学部の学部長宮園浩平さん(60)は、山極博士が人工がん実験に取り組んでいた当時について「死因のうち、がんは少数で、結核に代表される感染症が中心だった。だから野口英世や北里柴三郎ら細菌学者が注目された」と指摘する。「そんな中、山極博士は100年後に役立つがんの研究を切り開いた。東大医学部の歴史で最大の功績と言つていい。博士の実験成功が与えたインパクトで研究者が増え、日本のがん研究が進んだのは間違いない」

東大医学部は今も、博士が使った机などを学部に展示している。

山極博士の実験成功から約半世紀がたった66年、元ノーベル賞選考委員のフォルケ・ヘンシエン博士が来日し、記者団の前で「山極博士の功績は世界に認められている。ノーベル賞を授けられなかったことは誠に残念だ」と述べた。

## 2人に1人がんになる時代に



有明病院のロビーで、がん研究会の沿革と山極博士の功績についての掲示を見る永井さん(右)と石川部長



東大医学部に展示されている山極博士の机

## 100年後役立つ研究輝き

東大医学部に展示されている山極博士の机

## 映画「うさぎ追いし」の公開を前に

